

## はじめに ― 2011年度を振り返って

放送倫理・番組向上機構[BPO]

理事長 飽戸 弘

2011年度は、東日本大震災の報道に放送が全力で立ち向かった年として、歴史に長く刻まれることでしょう。

2011年3月、想像をはるかに超える災害を、放送はリアルタイムの映像と音声で伝え、緊急かつ安心安全の情報伝達で、大きな力を発揮しました。災害発生から1年以上経った現在も、災害関連の放送は続いています。時の経過とともに浮かび上がってきた課題、被災地の立ち直る努力や姿などを広く伝えなければならないという、放送局の覚悟が読み取れます。

一方、大震災関連報道では、テレビや、柔軟な番組編成で被災者と向き合ったラジオのほか、個々の被災地域住民の生活に欠かせない情報を提供したコミュニティFM放送など、それぞれが持ち味を發揮して情報を発信しました。また、放送とネットとの連携が、多くの視聴者にとって、より使いやすい情報伝達のかたちを作り出しました。新聞も、文字情報を被災者の手元に届けることに必死で取り組んだことでしょう。

つまり、東日本大震災の報道を機に、最新のメディア状況がはっきりと姿を見せ、さらに将来の可能性を予感させたのです。

では、テレビを中心とするメディアが、視聴者にどのように受け入れられてきたのか、放送をテーマに研究を続けてきた私から、ほんの一部ですが紹介しましょう。

日本の“テレビ黄金時代”は1960年前後からの約10年間である、という分析があります。テレビは娯楽の中心でした。今に伝わる名番組がいくつも生まれました。制作者の若々しいエネルギーが爆発した、そんな活気ある時代でした。しかし、その後の高度経済成長に伴い、娯楽はゴルフ、旅行と多角化していきます。そこにインターネットが現れました。テレビの持つ絶対的な長所、すなわち動画と音声、それをリアルタイムで送ることができる。しかも、誰もが発信者になれる――。この機能に注目し、従来のメディアの担い手である新聞や月刊誌、書籍も一斉にネットの世界に参入しています。この現象を、端的に表現すれば、「すべてのメディアがテレビになる」ということです。

一方、テレビも、映像と音声で現実の世界を忠実に映し出すことから、いまや現実を越えて描き出す技術を駆使して、報道に、娯楽に、新しい表現を生み出しました。受信方法も多様化し、どこにいても受信できるように進歩しました。

この激しい競争のなかで、テレビ・ラジオが生き抜くためには何が必要であるかは、言うまでもありません。それは、質の高い情報を、質の高い番組コンテンツを送り続けることです。受け手の関心に的確に応え、安心安全、いのち・生活を守るとともに、腹の底からの笑いを誘い、楽しめる放送こそが、視聴者の支持を得るものと、私は確信しています。

ここで、視聴者の支持を得る報道・番組を作るために気をつけていただきたい点を、BPOの役割に沿って、二つのことについて述べたいと思います。

まず、“視聴者が何を求めているかを的確に捉えること”です。BPOには、1日に約50件、1年間に約2万件の視聴者意見が届きます。ほとんどが放送への不満や批判です。視聴率が放送への視聴者の支持を計る方法の一つであることは間違いありません。しかし逆に、視聴者の不満、物足りないと感じている声も丁寧に聞いてほしいのです。

BPO青少年委員会は2011年度、放送の将来像や番組の社会的影響などについて調査を行い、放送局の制作者と視聴者の双方に同じ質問を試みました。その結果、例えば、「不快な暴力やいじめは放送すべきではない」に関しては、視聴者の7割近くが「そう思う」と答えていますが、制作者で「そう思う」という回答は、半数に満たない。「テレビで見た好ましくない言動を子どもが真似しても、深刻な問題ではない」という問いに対しても、制作者の4割が賛同していますが、視聴者の賛同は、その半分程度です。このほか、テレビ番組の子どもへの影響、番組の受け止め方についても、制作者と視聴者の間で、大きく食い違う結果が出ています。【\*Ⅰ】

BPOが同じく2011年度に実施した視聴者調査でも、「放送に意見を言いたいと感じたことがある」と答えた人は全体の半数になっています。しかし、実際に放送局などに意見を伝えたことのあると答えた人は、7%程度です。伝えなかった人の理由の中で、「伝えても効果が見込めそうもない」という回答が高くなっていることにも、注目してほしいのです。【\*Ⅱ】

放送が、制作者の自由な発想で作られなければならないのはもちろんですが、それだけに、番組がどのように受け止められているかには一層、注意深くあつてほしいと思います。苦い意見こそ、進歩のための糧として、よく聞き取るべきです。

もう一つは、“放送で誤りが見つかったときの対応”です。放送の中に誤りが見つかったときは、丁寧にわかりやすく訂正し、お詫びをしてほしい。誤りのない放送を心がけることはもちろんですが、誤りが見つかったときにこそ、放送局の誠意が感じ取れる訂正をしてほしいと思っています。複雑な現象の中から本質を見つけ出し、わかりやすく伝えるためには、たいへんな努力が求められることは充分、理解しています。残念ながら、誤りが生じることも否定できないでしょう。そのときこそ、放送局が視聴者に正しく向き合っていることが求められます。そして、丁寧な訂正が、視聴者のより高い信頼を得ることになることを理解してください。

私が、「裁判の判決は『終わりのことば』、BPOの決定は『初めの言葉』」と言うのは、問題が起きたときに「この程度でいいだろう」「なんとか小さく…」などと考えずに、そこで充分に考え抜き、正しい対処を見出すことが、次の番組向上に結びつくことを確信しているからです。その意味も込めて、2011年度、BPOは、「委員・調査役の放送局への派遣」をBPOの経費負担で行うようにしました。放送局の研修などで、報道・制作担当者と委員・調査役が語り合うことで、他局で起きた問題であっても、番組向上のきっかけにしてほしいと考えます。つまり、BPOの決定は、議論の出発点である、ということです。年度内に20件あまりの利用があったということです。今後も積極的な制度の利用を期待しています。

2011年度、BPO3委員会は、放送倫理の確立に向けて様々な取り組みを実施しました。その具体的内容は、この報告書に説明されています。委員会は、できるだけ放送の現場に届くようにとの気持ちを込めて判断し、決定を書いていると感じています。しかし、最終的にBPOの決定や提言を生かしていくかは、現場の報道・制作者の判断に委ねられていることを忘れないでください。他からの命令ではなく、自分で判断することに価値があるのです。そのうえで、ミスを恐れて汲々とするのではなく、新鮮な魅力を持つ放送を創り出してほしい、そこに全力を挙げてほしいと、願っています。

放送局の皆さんには、自分が民主主義を支える表現者であることの誇りと、それゆえに求められる責任を自覚して、日々の仕事に向かってほしいと思います。BPOは、自らの任務を果すことで放送局の努力に協力することを改めて確認して、2011年度年次報告書の巻頭のあいさつとします。

- 〔\*Ⅰ〕 『“新時代テレビ”～いま、ドラマ・バラエティ制作者666人は～』 報告書 2012年2月、BPO青少年委員会発行（2011年5月～7月調査）  
『青少年委員会 公開シンポジウム“新時代テレビ”いま、制作者たちへ』 2012年5月、BPO青少年委員会発行（2012年2月10日開催）
- 〔\*Ⅱ〕 『BPOの活動に関する視聴者対象調査 結果の概要』 『BPO報告』No. 106号参照（2011年10月調査）